

共創型対話学習研究所 研修会（実践研究委員会共催）開催報告書

実践研究委員会幹事 湯澤 卓(富山国際大学)

本年度の共創型対話学習研究所（以下、共創研と略）の研修会（実践研究委員会共催）は、2024年11月23日（土・祝）に、神奈川県川崎市にある日本映画大学で開催されました。実践研究委員会（以下、本委員会と略）の守内映子委員が会場校責任者として、企画から運営まで中心として尽力いただきました。また、日本映画大学の先生方や学生の皆さん、共創研の小嶋祐伺郎事務局長代理をはじめスタッフの皆さんが微に入り、細を穿って開催にご尽力くださいました。

本委員会と共創研は、本委員会顧問の多田孝志常任理事（金沢学院大学）が共創研の主宰者であることもあって、相互交流の機会をつくってきました。共創研は全国各地で毎年開催されてきており、昨年度は奈良教育大学附属中学校が会場でした。当時の開催報告書で、守内委員が次のように共創研について説明しています。「共創型対話を軸とした確かな実践の交流、理論と実践の往還という多田顧問の教育観に賛同し、学び合いたいという教員や学生が集う会である。」（2023年度日本学校教育学会実践研究委員会研修会開催報告書）本委員会にも共創研に関わりが深い会員が多く、これまでも共催という形で研修会を共に開催してきた経緯があります。今回の研修会には学会実践研究委員長である中山博夫常任理事、会場校責任者である守内委員の他、佐藤栄太郎委員、オンライン配信担当として湯澤等が参加しました。

今回の研修会には全国から幼・小・中・高・大学の教員や大学生、大学院生、行政関係者や民間団体のメンバーなどが予定参加し定員を上回る51名が対面で参加、オンラインでは6名の参加者となりました。

会場となった日本映画大学は、日本唯一の映画を実際に制作する大学です。前身である横浜放送映画専門学校は1975年に映画監督の今村昌平氏が開学されました。そのため、会場となった白山キャンパスには「今村昌平スタジオ」が併設されており、我が国の映画人を輩出する教育機関としてその存在感を示しています。詳しくは大学HPをご覧ください。（<https://www.eiga.ac.jp/>）

今回のテーマは、「教育における実践の智を創る」でした。プログラムは次の通りです。（敬称略、役名については研修会内の役割として記載。）

1. 開会の挨拶 （小嶋祐伺郎共創研事務局長代理）
2. 日本映画大学の紹介 （守内映子本委員会委員）
3. 基調講演「教育における実践の智を創る」 （多田孝志共創研所長）
4. 分科会
 - ① 主体的・対話的で深い学びを実現する課題追求型授業
・発表者 ；吉澤良紀（あきる野市立増戸小学校主幹教諭）

・コメンテーター ; 中山博夫 (本委員会委員長)

・コーディネーター ; 植西浩一 (奈良教育大学)

② 深い思考・対話を意識して ～総合的な学習の時間 「平和学習から」～

・発表者 ; 森山智紘 (出雲市立今市小学校教諭)

・コメンテーター ; 山口修司 (松江市立雑賀幼稚園長)

・コーディネーター ; 湯澤卓 (本委員会幹事)

③ 対話から育む同僚性についての一考察

～青木小 Fika でつくる校内研究イノベーション～

・発表者 ; 六川麻耶 (長野県上田市第6六中学校教諭)

・コメンテーター ; 青木一 (信州大学)

・コーディネーター ; 久保田一志 (栃木県立佐野高等学校・中学校)

5. 各分科会の報告 (各分科会のコーディネーターが代表発表)

6. シンポジウム

テーマ「表現と人間形成」

シンポジスト ; 大友 りお (日本映画大学特任教授)

田辺 秋守 (日本映画大学教授)

藤田 直哉 (日本映画大学准教授)

提言者 ; 増淵 幸男 (上智大学名誉教授)

諏訪 哲郎 (学習院大学名誉教授)

コーディネーター ; 多田 孝志

多田会員の基調講演では、現在の教育改革が皮層的・形式的になりがちと指摘し、教育の本質を捉えた確かな教育実践を問い直し、さらに科学・哲学など多様な分野の叡智と関連づけて「教育における実践の智」を共創していく方向が提言されました。

各分科会では、それぞれのテーマに従って実践発表が行われ、その後、充実した交流が行われました。

シンポジウムの前半は、日本映画大学の3名の先生方から、それぞれのご専門の紹介と、ご専門から見た教育への提言がされました。後半は、コーディネーターである多田会員を中心に、諏訪・増淵両氏からの論議を広げ提言がなされ、これからの教育の方向について議論がなされました。自然体験や野外活動が子どものチームワークや問題解決能力を育むこと、デジタル化が進む中だからこそアナログ的な体験が重要となること、学校の裁量権拡大に伴う新たな教育の可能性などが議論されました。映画制作のようなプロジェクト型学習や、海外でのドラマ授業(演劇ベースのプロジェクト型学習)など、創造的な活動を取り入れることで、現代の子どもたちのニーズに応える教育の在り方が目指せるのではないか、そういった創造的な学びの提供を思考・試行することが学校教育にも求められるのではないかという、魅力的で刺激的な議論が交わされました。全国各地から、まさに私費で参集した会場の参加者からも活発かつ鋭い視点からの発言が多

数出されました。

昨今の学校教育は、一斉授業と個別学習、デジタルとアナログなど、二項対立のような流れでその良し悪しを論じる風潮があります。学校教育においてはいずれもメリットがあり、いずれもデメリットがあるものです。そのどちら（の立場）も知りつつ、より良い教育を目指すということは大変有意義でした。様々な立場のメンバーが集まる研修会は、教育における広い視野をもつことができる大変有意義な機会だったことを申し添え、報告いたします。

（文責；湯澤 卓）

